

★ ★ 子どもの姿を「語り合う」といふこと ★ ★

三谷大紀

保育の場に入る二つの楽しみ

私にとって保育の場に継続的に入る楽しみは、二つあります。一つは、「○○ちゃんは、どうなったかな」とか「今日の○○ちゃんは、どんな姿を見せてくれるかな」と子どもたちのことを想像しながら、実際に見せてくれるさまざまな姿に出会うことです。

もう一つは、「○○ちゃん、変わったよ」とか「△△くんとか△△くんと一緒に遊ぶようになって、○○ちゃん、なんか雰囲気変わってきて、おもしろいのよ」などと、現場の保育者から見た子どもたちの姿を聞かせてもらうことです。日々子どもたちと生活し

ている保育者と話すことは、実際の子どもたちの姿を見るのと同様に、普段の子どもたちの様子を知らない私にとって、楽しい時間であるとともに貴重な時間なのです。

実際、子どもたちが降園した後、忙しい保育者の邪魔をしては申し訳ないと思いつつも、ついつい話し込んでしまいます。そんなときには、私から見えたことを、保育者にも聞いてもらいます。「やっぱりそうだったかあ」とか「えっ、そんなことあったの!？」というように、お互いが見た子どもの様子を語り合っているうちに、手の空いたほかの保育者も「あつ、私が見たときは、○○だったのよ」というように、どんどん語り

合いの輪が広がっていきます。もちろん、いい話ばかりとは限りません。「どうしようか」と思い悩まされる子どもの姿が話題になることもあります。それでもなお、それぞれが見たり、感じたりした子どもの姿を語り合い、共有することは「おもしろい」のです。

それは、私が、毎日じゃなくて時どきひょっこり園を訪ねる立場の人間だから言えることだと思われるかもしれませんが。しかし、保育者にとって子どもの姿を語り合うことは、私とその園に通うようになる前から、日常の保育の一部になっていました。そして、むしろ私自身は、その園に通っているうちに、そうした子どもの姿を語り合う「おもしろさ」に「いざなわれた」と感じることもさえるのです。

「語り合う」ことで見えてくるもの

では、どのように子どもの姿を語り合うことで見えてくるものとは、いったいどのようなものなのでしょう。具体的な場面を基に考えてみたいと思います。

ある保育所で新任保育者たちが、子どもの様子を報告し合っているときの事です。一人の保育者が、自分の担当している子どもが、家からおもちゃや人形などを持ってくるということを話題にしました。すると、「そうしたことをやめさせるべきではないか」、あるいは「保護者に向けて『保育所におもちゃを持たせないように』と伝え、持ってきてはいけないという『ルール』をつくらうか」といった提案が出てきました。しかし、やがて「うち（自分の担当）の○△ちゃんも持ってくるけど、いつも持ってくるわけじゃない」とか、「持ってきてても、全然に気に掛けていない場面もある」といったことや、「寝るときには、自分の家から持ってきたものをちよつと持っていると安心して寝られるみたい」といったように、次々と自分の見ている子どもの様子を保育者たちが語り始めたのです。

そのようにそれぞれの保育者が見ている子どもの様子を語り合っていくと、それぞれの子どもが家から私物を持つてくる理由が違うことがその場の保育者たち

に共有され、わかるようになり、最終的には「ルール」がないことを問題にしなくなっていたのです。むしろ、一人ひとりの子どもの気持ちや様子に添って、それぞれの子が、それぞれの場面において、おもちゃや人形を必要とするものの「意味」を考えることになり、さらにはそれらのことを語り合っていること自体に「意味」を見だし始めていったのでした。

この園の園長先生の言葉を借りれば、「ルールにすることは、親たちには言いやすいし、簡単なこと」です。「ルールだから持つて来ないでください」と言えただけなのですから……。しかし、ルールをつくるにしても、つくらないにしても、大切なことは、「子どもたちがそれをどうやって乗り越えていくかとか、いつも持つてきているものをどうやって手放していくか、あるいは、持つていくことの『意味』は何か」ということを考えることにある」のです。そのことを若い保育者たちは、仲間と語り合う中で実践し、その意義を実感し始めていたのです。つまり、一人ひとり

の子どもの行為の意味を考える上で、仲間とともに子どもの姿を語り合うことは欠かせないと同時に、語り合う中にこそ、語り合うことの意味が、見えてくると考えられるのです。

自分の見方を一時脇に置き、 相手の見ている世界をともし見る

子どもの姿を語り合うときには、相手（話し手）が今どんな出来事や事柄をおもしろがったり、喜んで、悩んだりしているのかを、いったん自分の見方や立場、既存の価値観などを脇に置いて、その人の身になって感じとっていくことが重要です。同時に、語られる子どもの身になって語られる出来事を感じとっていくことも必要不可欠です。

つまり、個人の見方や考え方を一方的（あるいは権力的）に評価し、「正解」・「不正解」を問うことなどはしないのです。相手や子どもの身になるからこそ、見えてくる世界があるのです。そして、異なる見方や

解釈を交流させ、多様な異なる視点に出合い、それぞれが自分の見方を問い直し、見方そのものを重層化させていくことが、その個人や保育者集団の育ちにつながるのです。

だからといって、お互いの見方や保育を全面的に肯定するわけではありません。同僚や先輩として違う見方や考えを伝えたり、提案していくことも当然起こります。しかし、それは、出来事を共有し、その意味や価値をとともに問い、よりよくしていくためにはどうすればいいのかともに探究している姿であり、その両者の出来事（子どものことなど）を「ともにわかろうとする」協同作業の中で起きていることなのです。

語り合いが起きる場の雰囲気

では、語り合いの場はどのようにしてつくられるのでしょうか。いきなり「保育カンファレンス」や「エピソード検討会」などを始めたとしても、一部の保育者の「日常の子どもの姿を大切にしたい」という強い

思いが空回りし、むしろ周囲の保育者や若い保育者がそうした一部の保育者の目（評価するまなざし）を意識して語りにくくなったり、職員の間に対立の構造をつくってしまったこともあるのではないのでしょうか。特に、子どもの姿や保育内容を題材にした語り合いになると、個々の保育観の違いが可視化され、それに対する戸惑いが各々に感じられることも充分にあり得るのです。また、それぞれがエピソードとして子どもの姿を記録し、それを、語り合いを誘発する材料にしようとしたとしても、お互いの記録を見せ合うことについて抵抗感をもつ保育者が少なくない場合もあるでしょう。つまり、誰もが自分の言葉で、自分の視点から子どもや保育について語れる雰囲気なくして語り合うことはできないのです。ではそうした雰囲気は、どのようにしてつくればいいのか。

もちろん、人間同士の営みですから、こうすれば間違はなくうまくいくというようなやり方はありません。しかし、ある程度経験年数を重ねた保育者やベテ

ラン保育者のあり方が、周囲に与える影響は大きいように思います。

たとえば、こんなことがありました。ある幼稚園の中堅保育者Aさん（以下、Aさん）は、自閉症の男の子の担任になった際、その子に振り回され、戸惑いながらも、その子の姿を園内の保育者はもちろん、事務員や保護者らと共有しながら、その子に対する理解を深め、その子との関係を築いていたことがありました。だからといって、最初から周囲とその子の姿を共有しようと思っていたわけではなかったようです。むしろ、自分だけではどうにもならず、周囲に助けを求め、自分がかかわれなかったときには、自ら積極的に聞きに行くことで、その子がどんな様子だったのかを周りにも伝えてもらい、それらの情報をつなぎ合わせ、その子にとっての意味を読み取り、自分なりののかわり方を模索していったのです。気づくと、Aさんにとって自分の保育を周囲に開くことは当たり前（重要なこと）になっていて、園内の大人たちは、その子の

姿を共有し、連携を深めることになっていたのです。

ある程度経験年数を重ねたAさん自らが、自分が「わかっている」子どもの姿だけでなく、むしろ「わからない（手に負えないことなども含む）」子どもの姿を仲間と共有し、自分の保育に活かしていこうとするとき、その行為の意義が園全体で理解され、広まることもあるのではないのでしょうか。つまりAさん本人が意識しているか意識していないかは別として、本人自身だけでなく、周囲の保育者にも、「自分の保育を開くことや、仲間とともに子どもの姿を共有することの重要性」を実感させることになったのです。

Aさんが周囲に自分の知らないその子の様子を聞いたり、周囲の見方を知りたがる背後には、その子のことをよりよく「わかろう」とし、自分とのかかわりに活かそうとする姿勢がありました。そして、仲間と語り合う中で見えてくる新たなその子の育ちを喜び、味わっていたのです。そうしたAさんの醸し出す雰囲気は、決して深刻なものではありませんでした。むしろ

ろ、はたから見ていると、大変ではあるものの、その子のことを仲間とともに理解していくことがうれしくてしかたないようにも見えるのです。しかし、喜んでいるのはAさんだけではありません。Aさんをサポートする周囲の保育者や事務員らも、自分のことのようにその子の育ちを喜んでいたのです。つまり、Aさんが自分の保育を開いていくことは、たんに子どもの情報を共有することを普及させただけではなく、子どもたちのことをよりよく理解したい、よりよく援助したいと願いをもち続けながら、見えてくる子どもの育ちを喜び、味わっていかうとする姿勢そのものを仲間と共有することになり、誰もが自分の言葉で語れるような雰囲気をつくる一つのきっかけをつくっていたと考えられるのです。

このように、一人の子どもを巡って、その子を取り巻く園内の大人たちの関係が、たんに「一緒に職場で働く関係」から「ともに保育する仲間」へと変容していく過程は、「子どものことについて語ろう」とか

「語り合いが大事」とスローガンを掲げ、周囲に強いるのではなく、自ら実践していく中で育まれる「語り合い」や連携もあることを示しています。

「暗黙の約束事」をつくらない

また、誰もが自分の言葉で話せるということは、その場に「暗黙の約束事」が存在しないことを意味します。ここでいう「暗黙の約束事」とは、一部の保育者（たとえば、ベテラン・中堅）にとっては当然のこととして行われていることや、園では当たり前になって



いることに、知らない者（たとえば、若手・新任）は「触れず」「従い」「身に付けていく」ことを指します。

そうした「暗黙の約束事」が存在しなければ、「わからないこと」「疑問に思うこと」は率直に聞き合うことができません。むしろ、包み隠さず「わからないこと」は言い合い、共有すべきでしょう。なぜなら、そうすることで自分にとって当たり前の事柄が必ずしも他者にとっては当たり前でない事実や、その当たり前になっている事柄そのものを問い直す機会、すなわち自分自身の見方や既存のやり方を「省察」することが可能になるのです。「省察」は、一人の作業であると同時に、仲間との共同の作業です」（津守、一九九八、一六〇頁）。まさに、そうした「省察」が生成される媒介として、本来「語り合い」は機能するのです。

そもそも、保育を語り合うことの意義は、多元的な視点から保育をとらえ、「独りよがりな見方を反省し、実践を様々な観点から吟味する柔軟性と多様性を

育ててくれる」（佐伯、二〇〇〇、四十四頁）にあるのですから。

「語り合う」ことが育む 「ともに育つ関係」

日々の保育の中で子どもたちが見せる姿は、実にさまざまです。そして、保育者たちは、そうした目の前の子どもや保護者の対応に追われています。しかし、個々の保育者が日々の保育の中で対応に追われていること、悩んでいることなどを、同僚をはじめ園内の仲間、保護者、研究者などと、いかに共有しているかによってその園の実践は変わってくるのではないのでしょうか。子ども同士が、子どもと保育者が、保育者同士が、保育者と保護者が、保育者と研究者が、保護者同士が語り合う関係をつくり、見えてくることを喜び合い、悩み合い、驚き合っていく中で、お互いへの理解も、関係も深まっていくのです。その過程にこそ、子どもの育ちも、保育者の育ちも、保護者の育ちも、

保育実践の深まりそのものも、埋め込まれているのです。

今、保育者には、いろいろな資質が求められ、さまざまな研修や評価の必要性が強調されるとともに、保育者間、保育者と保護者や地域の人々などとの連携の重要性も指摘されています。しかし、形式的に園内研修の数をこなしたり、项目的に評価し合えば、保育者の資質や保育の質が向上するというわけではないでしょう。

悩みや葛藤も含め、「子どもにとってどうなのか」「子どもにとってすごい」「私もやってみたい」など、子どもたちが見せてくれる姿を通して園に集う大人たち（保育者・職員はもちろん、保護者・地域の人、研究者など）が自然と語り合い、動き出すとき、本来の意味での連携が生まれ、保育者の資質も、実践そのものも質も向上していくのではないのでしょうか。

私たち保育に携わる者は、子どもの姿を語り合うことをとおして、さまざまな他者の見方や助けを必要と

することを実感する一方で、自分にできることを見いだし、子どもの育ちや、仲間や園の保育に貢献していることを実感していきます。あるいは、自分の身になってくれる仲間の存在の大切さ、ありがたさを実感していきます。こうした中で、子どもたちだけでなく、子どもを取り巻く大人たちも育っていくのです。そうした互いに支え合い、育ち合う関係が園全体（さらには保育界）に広がっていくとき、本来の意味での連携がいたるところでわき起こり、保育の場が、「子ども・保育者・保護者・研究者がともに育つ場」になっていくのではないのでしょうか。（浦和大学こども学部）

引用文献

- 津守真一九九八「保育者としての教師」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『教師像の再構築（岩波講座現代の教育六）』岩波書店、一四七・一六八頁
- 佐伯胖二〇〇「学び合う保育者・チーム保育における保育者の成長と学び」『発達』八十三号、二十一巻、ミネルヴァ書房、四十一・四十七頁